

国立歴史民俗博物館・玉井哲雄編

『アジアからみる日本都市史』

(歴博国際シンポジウム)

山川出版社 二〇一三・二刊

A5 三三六頁 四八〇〇円

本書は国立歴史民俗博物館で二〇一一年に行われた国際シンポジウムをもとにする論文集である。シンポジウムに至るまでに編者らは次のような展望のもと都市史の共同研究を進めてきたという。

古代都城に加えて、平泉・鎌倉・寺内町・中近世城下町などを中国文明圏さらにはインドなどとのつながりの中で捉えていくこと、またアジア全体に及ぶ「都市的な場の基盤となる共通の条件」に注目することであり、それは本書が提示しようとする「アジアからみる日本都市史」の目論見でもある。

本書の構成はシンポジウムを再現して、「セッションⅠ 中国都城の都市世界―宮殿・儀礼空間と都市」、「Ⅱ インド文明の都市世界―寺院・宗教空間と都市」、「Ⅲ アジア周縁の都市世界―インド・中国の周縁世界と都市」、「Ⅳ 全体討論」というものであり、Ⅰ～Ⅲにはそれぞれ三本の論考と一本のコメントが収録されている。また巻頭には玉井哲雄「日本都市史の構築―アジアを視野に」がおさめられる。以下、玉井による同文章からその論点を紹介する。ここではまず、中近世の日本都市史が中国などとの影響関係を

ほとんど取り扱わず、列島内に完結的な通史として描かれてきたと問題提起がなされ、それに対して①東アジア全体からみた古代都城の形成過程、②近世城下町の形成過程における東アジア情勢、③アジアにおける中世都市平泉の形成過程、という三つのテーマが再考にあたるための具体的な手掛かりとして挙げられる。さらに①～③の検討をつうじて、日本・中国・インドの都城および日本の中世都市・近世城下町における中心的な空間の性格が比較され、政治的拠点を中心とする中国および日本の都城と日本の近世城下町、宗教施設を中心とするインドの都城および平泉など日本の中世都市、といった括り出しがなされる。日本における中近世移行期の都市とはいかなればインド的秩序が中国的秩序によって奪取され、周縁に追いやられていく過程とみることもできる、という指摘さえ行われる。ほか政治的拠点と宗教施設が一本の街路で結ばれる形態に中世都市の普遍的な空間構成が求められるなどの指摘ともあわせて、本書には政治的拠点―宗教施設の性格の強弱や布置によって日本―アジア都市の比較史を展望しようとする視点が呈示されているよう。

各論ではアジア都市比較史の道を補強すると目される次のような論点も示される。

都城の存立が交通網を前提にすること(妹尾達彦)、湖を内包し胡同による地割体系をもつ大都―北京都城モデルのありよう(包慕蓮)、円形ないしは非整形都市と方形都市の併存あるいは前者から後者への移行(布野修司・宮武正登)、都市方位軸の指向性(佐藤浩司・モハン・パント)、都城モデルの受容局面における在地側の取り

扱い（大田省二）、などの問題群である。

各論考はそれぞれに魅力的で有益な情報が多い。本書にきざした諸論点について、今後の展開が期待される。

（松田法子）